

# IC たより

(社) 国際 IC 日本協会機関紙

Building trust across the world's divides

Initiatives of Change Japan

E-Mail: nagano@jp.ific.org  
HP: www.jp.ific.org

発行年月日 2009年9月15日  
発行所 (社) 国際 IC 日本協会  
〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-54-14  
TEL: 03-5429-1156 FAX: 03-5429-1157

頒価 1部100円



- ◇ 目次 ◇
- 第15回ミニ HOHO のご案内
- 第32回国際会議の報告
- AP チームの紹介
- 学校訪問記
- 入会案内・編集後記他

## 〈第15回ミニ HOHO—心を育てる ネットワーク—開催のご案内〉

心を開いて、人の声に耳を傾けると、自然に他の人の人生が心に入ってきます。自分の人生を語るにより、自分を整理し、前に向かうことができるでしょう。生きる力の源となる心を育て、育て合う場が、ミニ HOHO です。

日時：2009年10月10日(土)～11日(日)

会場：天城ホームステッド(日本 IBM エグゼクティブ研修センター)

自然豊かな場所で、日頃の疲れを心身ともに癒し新たに出発するパワーを蓄える旅に出かけてみませんか。お申込・お問合せは、(社) 国際 IC 日本協会事務局まで。

矢野弘典

中日本高速道路(株)取締役会長  
(社) 国際 IC 日本協会会長

### 講演 「私のリーダーシップ」

孫が4人おりますが、子供に通用することを会社もやらなくてはいけない、子供に言うことと同じことが会社にとっても重要になってくるのです。つまり、約束を守ろうとか、弱いものいじめをしてはいけないなどということです。

従業員を大切にすること、そして従業員から会社が信頼されることが大切です。東芝時代の話ですが、1991年コロンビアで大使館襲撃ゲリラ事件が起きました。東芝の社員も2名誘拐されてしまいました。当時50代と20代の社員が拘束されてしまいましたが、最終的には無事開放され、犠牲者が出ずに済みました。若い社員のほうは隙を見て逃げ出そうと思っていたようです。しかし50代の男性社員は、逃げてみず見つかって捕まってしまうと思い、逃げないで待ち続けた判断が結果として無事解放につながったのでした。解放後、年配の社員が語った言葉が今でも忘れられません。彼は「ただひたすら会社を信じて待ちました」と語ってくれました。社員と会社の絆が如何に深いか、会社が如何に信頼されているかをこのひと言が物語っていたと思います。

私の今の会社 NEXCO 中日本でも「良い会社で強い会社」という経営理念を掲げて、実現に向けて頑張っております。良くなければ信頼されない、強くなければ誰もついてこない。

道路公団が民営化した当時、社内の皆が自身を失くしていました。ある社員は、妻が買い物に出かけても肩身が狭く、子供は学校であの道路公団の家の子どもと虐められていると話しました。それを聞いて私は、これは根本的に社内を変えていかなければと決意しました。社員は家族と一緒にいると思っています。だから経営理念の中に「良い会社」という言葉を入れました。

東芝時代、当時社長が地方の工場を回ることがありました。工場長は、土光さんが来るというので、工場内の見える部分はすべてピカピカにして到着を待っていましたところ、土光さんは着眼点が違います。来るなり、「奥の扉を開けろ」と命じまして、開けると汚い道具やら何やらがどさっと出てきて、すぐにわか掃除がバレてしまった。その情報は全国の東芝の工場にすぐに行き渡り、その日から全国の工場中が本当の意味でピカピカになりました。各地の工場長は社長がいつ来てもいいように、工場内を常にきれいにして待ち構えているようになりましたが、そうすると土光さんは工場を回らなくなりました。土光さんのほうがはるかに上手(うわて)だったんですね。

## 第32回国際会議



### 「変化への一歩を踏み出そう」

第32回 IC 国際会議開催(2009年6月5～7日) in マホロバマインズ三浦

信頼と思いやりを取り戻すために、変革への一歩を踏み出す勇氣を持つ、という目的のために約60名の参加者が集い、14歳～84歳まで又インド、ヴェトナム、韓国、コンゴ、ケニア等からの青年たちを迎え、人種、宗教の違いを乗り越えて、お互いの心を開いて語り合い、次への一歩を踏み出す機会となった。

また、インドの IC 本部パンチガーニで研修を受けた4人の女性たちが静かな時間をリードして、自らの体験を語り、歌やスキットで会議を盛り上げた。



▲基調講演を行う矢野会長



▲パネルディスカッションの風景

### パネルディスカッション 「私のリーダーシップ」

上記テーマで、様々な分野の方々から、それぞれの立場でのお話を伺うことが出来ました。

◆佐谷 隆一氏 生まれは横須賀市で、東芝で40年間お世話になりました。そのうち半分20年間を労働組合の専従として定年まで仕えました。1982年に労使と初めてスイスのコーに行き、当時はタバコをすっていたのですが、コーでは禁酒禁煙とのことで、MRAのおかげでタバコをやめることができました。

当時東芝ではストライキが盛んでした。労使の関係は悪く、徹底した話し合いをしようと、共にコーへ参りました。組織の中に40年いた者として、リーダーとは決断と実行だと思えます。南極越冬隊の隊長だった方のことですが、「石橋を叩

いては渡れない」失敗を恐れずに渡るべきだ、ということです。東芝時代ですが、研修は毎回つまらないものでした。そこで私が長になったときに、これを一新しました。共に体を動かし、共に意見を交換し合う、つまり講義型から参加型に変えたのが、今も受け継がれています。変えようと思ったら、すぐ行動することこそがリーダーシップだと思っています。現在はカンボジアで学校を作ろうという活動をしております。

◆下川 朱美氏 大分県出身です。大学病院に約8年間勤めました。夫の仕事の関係で、各地を転勤してまいりまして、現在は久留米市で看護マネジャーをしております。職場では、何よりも大切なことは、相手の話をよく聞くことです。

老老介護で悩んでいる方が多くいらっしゃいます。その際に、ちょっと一言かけてさしあげることを心がけています。仕事柄、褒められることよりも叱られることのほうが多く、人間関係がどうもギクシャクしてしまいます。そこで思うことは、良いことがあれば褒めることが大切なのではないかと考えて、それを心がけています。職場では「ほめカード」というものを自分で作って渡すようにしています。このように感謝の気持ちをきちんと相手に伝えることが大切だと思いますし、実践しています。

◆高柳 静江氏 愛知県出身です。27年前、山崎房一先生の考え方に会いました。当時私は息子の教育のことで大変悩み、息子をがみがみ叱ってばかりいました。先生の考え方は、がみがみ叱ってはダメだ。親の見栄や世間で叱ってはダメだ。ただ私が変わると息子が変わり、すると夫が変わり…ということを目の当たりにし、これは本物だなと思いました。家庭が人間関係の原点です。私は以前、家庭の中心は、つまりリーダーはお父さんと信じていました。しかし夫はそれに向いていないということに次第に気づいて参りました。そこで私、つまりお母さんがリーダーシップをとろうと考えました。一般に、お父さんは家庭が自分の

中の一部でしかありませんが、お母さんは家庭がすべてなんです。そのことに私は後々気づきました。お母さんが心配していると、子供たちはお母さんの顔色を見て、迷ってしまいます。やはり女性のリーダーシップが大切のように思います。

◆中山 啓介氏 播州赤穂、赤穂浪士で有名な地で生まれました。大阪で大学生のときに MRA/IC に出会いました。ICとの関わりでの大きなことは、私自身が大きな変化を体験したことでした。その後静岡にある日米の合弁会社で社会の実践の中で、ICの精神をどう生かすかということを実践すべく就職をし、結婚をしました。自分自身のリーダーシップという考え方が必要です。褒めるときには褒め、叱るときには叱る、心がけています。正直だけでは相手が傷つくということもありますので、相手の立場に立って、正直とともに思いやりを持っていくことが大切だと思います。古来日本はどこかの国をモデルとしてそれを目指して参りましたが、今やモデルとする国がなくなってしまったことが問題であると考えていました。昨年インドでの会議の時に、ある方から、日本が世界のモデルとなる選択はないのですか、と質問されまして非常にショックを受けました。

#### アンケートより

留学生の方とお話ししたり、触れあえた事がとても心に残りました。静かな時間には、心が落ち着けば冷静になって考えることが出来ると思いました。(14歳中学生) どんな場でも誰でもリーダーになれると感じた。(会社員) 褒めること、つまり他者を認めることが、もっと世の中に浸透しても良いのではと思います。(学生) 誰かを責めるのではなく、その前に先ず自分が何をしたいのか、自分の責任を考えること。(会社員)

# AP チームの紹介

## ASIA Plateau Team

インド国際センターで研修を受けたインド、ベトナム、韓国の青年たちで構成されたAPチームは日本各地を回り、正直に心を開いて自分のストーリーを話しました。〈どのように生きて行くべきか〉〈どのようにチェンジしたか〉を聞いているうちに皆各々人生を振り返るきっかけになったのも大きいことでした。

ベトナムのタムさんはいつも元気いっぱいチームをいつも活気づけてくれます。彼女の面白い冗談で周りの人はエネルギーをもらいました。子供の中に入り込んで遊ぶ彼女は学校の子供たちが一番人気ものでした。

インドのペノさんは自律していて、チームの中でどっちにも片寄らず何でも受け入れてくれる人。そのためチームの皆が良く相談をしに行きました。インドでもナガランドというアジアに近い地方から来た彼女は日本人により近く、インドの広さや民族や言葉の違いなど多くのことを教えてくれました。

韓国のジースンさんは多彩な経験をチームに教えてくれました。特にAPチームのチームワーク作りの中心となってみんなをリードしてくれました。歌やスキットにも大活躍でした。

私、ヒジンは、日本語が話せる韓国人として、APチームと、日本のチームをつなぐ役割を果たすと共に、学校の子供たちにも母国語と外国語の勉強が大切であることを伝えました。

文章：チェ・ヒジン

### <神戸ミニHOHO>

7月19～20日 有馬温泉  
参加者30名

第2回神戸ミニHOHO、その中には「この頃大変なことがいっぱいあったので、私の気持ちを癒すために来た」という人もいました。そして今回はAPチームが静かな時間がなぜ必要とされるか、どのように過せばいいかを伝え、一緒に体験をした時、参加者の皆さんが驚く程深くまで考えてそれを正直に皆の前で話してくれました。「今まで自分は意味のない人生を生きて来た。今日APチームの話聞いて意味のある人生について考えてみた」「私はいつも回りに嫌われたくなく、自分の本当の姿を見せなかった。でも正直に自分の本当の姿を見せることが自分のままでいられるために、とても大切なことだと感じた」などの声が寄せられ、「今回はAPチームが歌を歌ってくれてプログラムに隙間がなくずっと集中できた」とAPチームとの再会を願いながらの閉会となりました。

▲神戸ミニHOHO参加者全員での記念撮影

を癒すために来た」という人もいました。そして今回はAPチームが静かな時間がなぜ必要とされるか、どのように過せばいいかを伝え、一緒に体験をした時、参加者の皆さんが驚く程深くまで考えてそれを正直に皆の前で話してくれました。「今まで自分は意味のない人生を生きて来た。今日APチームの話聞いて意味のある人生について考えてみた」「私はいつも回りに嫌われたくなく、自分の本当の姿を見せなかった。でも正直に自分の本当の姿を見せることが自分のままでいられるために、とても大切なことだと感じた」などの声が寄せられ、「今回はAPチームが歌を歌ってくれてプログラムに隙間がなくずっと集中できた」とAPチームとの再会を願いながらの閉会となりました。



▲APチームの4人組。左からジースンさん、タムさん、ペノさん、ヒジンさん

# 学校訪問

## 「心を開いた語り合い」

APチームは国際会議に続いて、6月初めから7月の終わりまでの7週間で25にわたる教育機関を訪問し、2000人余りの生徒や学生らの前でプレゼンテーションを行った。今年は関東地域だけでなく、初めて関西と九州の学校へも訪問する機会を得た。

### 小田原訪問

小田原市教育委員会からの要請に応え10日間で市内の小学校13校を回った。特別支援学級や不登校の生徒たちが集まるフリースクールでは、感情を表現することが苦手な子どもたちも、APチームと触れ合うと顔も上げられなかった子どもたちまでもが目を輝かせて大声で笑ったので、先生は「こんなに大声を出して笑う姿を初めて見ました」と驚いていた。



▲ニュージーランド先住民のウェルカムソング“ホキマイ”を歌い踊るAPチームに見入る小学生(杉並区荻掛小にて)

各地の小学校では出身国の民族衣装や文化の紹介を「国際理解」の導入部とし、歌や寸劇を加え、「静かな時間」として自分の心の声を聴く体験を行い、心に浮かんだことを発表する心の教育を行った。



▲子供たちと一緒に給食をいただきました

ある小学校の先生からは「人を指差すと3本は自分の方へ向く」ということばと歌に内心ドキッとさせられた」、「生徒を45分間飽きさせないことに驚いた」などのコメントが寄せられた。また、APチームの「日本人として誇りに思うことは何ですか」という問いかけに、ある小学生からは「この60数年間、戦争をしていない」という答えも出

たものの、なかなか手が上がらないクラスが多く、先生たちからは「日本のことを考えさせることの大切さに気づかされた」との声がたくさんあった。

大学などでは「リーダーシップ」をテーマにそれぞれの経験をシェアし、自らが進むべき道についてディスカッションを交わした。短い時間の中でも一人ひとりと対話することを心がけていた。「変化させたいなら、まず自分を変える」という言葉を聞いて、今まで避けてきた問題と向き合おうと思った。「これからどんな風に生きていきたいか、本当にやりたいことは何なのかを毎日自分に問いかけ、そのことに自信を持って取り組んでいきたいと考えました。」と学生らがレクチャーを振り返った。文化や言葉が違っていても、同じ人間として素直に、正直に語るAPチームの勇気に感動し、学生らは心を開いてくれていた。



▲大学の貴重な講義の時間をAPチームの為に割っていただきました。



▲桐蔭横浜大学キャンパス内にて

## <入会のご案内>

当協会は皆様からの会費及び寄付金により運営されています。お寄せ頂いた浄財により内外の未来を担う青年たちの育成に寄与することを希求しております。ぜひご入会頂き、ICの活動にご参加・ご支援下さいませようお願い致します。

- 正会員（議決権を行使できます）
- 個人会員 年額 6,000円
- 法人会員 年額 50,000円
- 賛助会員
- 個人会員 3,000円以上
- 法人会員 50,000円（一口）以上



▲ICハウス（東京都世田谷区）

会費・寄付金の振込先

- |   |   |
|---|---|
| 1. ゆうちょ銀行 〇一九店 当座預金<br>口座番号 / 019-0038289<br>口座名 / シダノホジソ コサアイシニホキヨウカ | 2. みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金<br>口座番号 / 162-4945790<br>口座名 / 社団法人国際IC日本協会 |
|---|---|

## @編集後記

本号は今までのICニュースに代えて、新しい試みとして「ICたより」をお届け致します。本機関誌に関してご意見等がございましたら、(社)国際IC日本協会までお寄せ下さいませようお願い申し上げます。  
編集企画委員：高橋久子、長野清志、岡本さくら、弓場睦、チェ・ヒジン、海老原真美

